

令和 6 年 6 月 21 日現在

機関番号：32643

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00110

研究課題名（和文）自然主義的世界観が持つ形而上学的前提についての研究

研究課題名（英文）Studies on Metaphysical Foundations Possessed by Naturalistic Worldviews

研究代表者

冲永 莊八 (Okinaga, Shohachi)

帝京大学・文学部・教授

研究者番号：80269422

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：研究計画では、進化や生命現象の自然主義的理解の根底においても、自己保存のような生命固有の働きが前提となっている論理構造の究明を目的としていた。

研究ではより具体的に、物理学者のシュレーディンガーがエントロピーに対して負のエントロピーを生命現象の特徴と見なし、物質の機械論的法則の根底に熱力学の統計的法則を据えた議論の特徴と問題点を分析した。これは原子の運動の複合によって説明する機械論的世界と、生命の自発的、秩序形成的性質とを結びつける試みであった。また生物進化における突然変異の偶然性と自発的秩序化との裂け目について、ダーウィニズムや物理主義と、古典的生命論との両方から問題点の解明を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究成果が関わるのは、物質と生命との裂け目の問題を通じて、物質の無情的・機械論的、客観的性質と、生命の有情的・自発的・主観的性質との断絶をいかに結びつけるのかという問題であった。これは具体的な生命論を通じて、実在に関する哲学一般の問いに根本的に関わる点で学術的意義があると思われる。

たとえば西田の「形成作用」のように、機械的な物質の属性ではなく反対に純粋に自発的な主体でもない生命の特性を取り上げるとき、この作用は機械論的世界を前提にするとそこから決して帰結し得ないが、作用自体を前提にするならば機械論的世界の方が形成の結果として扱い得て、かつその論理も存在論的に妥当性があることを確認した。

研究成果の概要（英文）：The research plan was to investigate the logical structure that presupposes life-specific and not material workings such as self-preservation, even at the ground of the naturalistic understanding of evolution and life phenomena.

More specifically, our research analyzed the characteristics and problems of the argument that the physicist Schroedinger regarded "negentropy" in relation to entropy as a characteristic of life phenomena. Then we examined his argument on statistical laws of thermodynamics as the basis of the mechanistic laws of matter. This was an attempt to connect the mechanistic world, which is explained by the composite motion of atoms, with the spontaneous and order-forming nature of life.

And we also examined the problem of the cleavage between the contingency of mutation and the spontaneous ordering in biological evolution from the viewpoints of Darwinism and physicalism and the classical theory of life.

研究分野：哲学・倫理学 思想史

キーワード：機械論的世界 物理主義 生命 負のエントロピー 創発 汎心論 目的論 形成作用

## 1. 研究開始当初の背景

研究代表者は本研究の開始まで、William James や C.S.Peirce, F.C.S.Schiller などのプラグマティズムの研究を通じ、概念的な知は有用であるが実在ではなく、一元的な知は世界を尽くさないこと、そして概念的な把握が形而上学的な問題をも生み出す、概念と実在との背反の構造を研究してきた。そこで一般的に知は有用性の範囲内において真であり、その真理は問われない前提に基づくことを確認した。

他方で、近年の生物学の哲学などの研究を通じて、生命現象の自然主義的解明の方法も学んだ。そこでは、自然主義はある前提の上に成立している一面的な知であること、また自然主義的な哲学とプラグマティズムとの比較研究は意外に少ないことに気づかされた。この点は、沖永宜司「プラグマティズムと形而上学」『哲学研究』、2014、pp.18-41.などで論じた。

また現代の量子論的意識論では、量子レベルの不確定性を計算可能性に結びつける議論もある一方、主観による観察が加わることで実在が確定されるとする立場もあることにも気づかされた。こうした経緯で物理的な自然主義も実在の aspekto のひとつと仮定するに到り、Takashi OKINAGA, “Metaphysical Contradictions and the Plurality of the Universe”, Society for the Advancement of the American Philosophy, in APA Central Division Meeting, 2016,3 など、その問題意識を示した。

さらに合理的必然性の宇宙が偶然性に立脚する構造については九鬼周造の偶然論から学び、また南部理論に見られる偶然とも言える対称性の破れから安定した保存則が始まるという考えも摂取して、必然と偶然、法則と法則以前の間を Takashi OKINAGA, “‘Originary Event’ and ‘Spontaneous Breaking of Symmetry’: The Attitudes of Kuki Shuzo and Nanbu Yoichiro toward the causal Law”, The Third Conference of European Network of Japanese Philosophy, Nov. 3, 2017.などで示した。こうした問題意識に基づきながら、生命科学、特に進化における生物の巧妙に組み立てられた目的に思われる器官や適応システムと、目的性が完全に排除された突然変異との断絶をどう埋めるのか、という問題に向かい合うことになった。そこで現代の自然主義的な生命科学の客観主義的で機械論的な自然観が、その自然観から導出できない生物の目的性や自己保存への存在欲求などを前提として問わないままにしておいているのではないか、という仮説に到った。本研究課題の表題にある、自然主義的世界観が持つ「前提」という考え方はこのようにして導かれた。

## 2. 研究の目的

本研究は、合理的な世界はなぜ、どのように、その合理性に含まれない領域を前提とせざるを得ないかという問いに答えることを目的としていた。合理的世界観や自然主義の持つこうした矛盾的構造は、特定の枠組みに則った知の体系が、その枠組みに入らない実在の領域に基づくことによって成り立つ、という一般的な構造に則ると推測される。本研究課題はこの構造の究明を、具体的な哲学史、科学史上の題材を踏まえながら遂行し、さらに合理的な知の体系を基づける問われない前提の構造を一般的に解明することを目的とする。

このための具体的な題材として、無目的な自然選択はいかに生命の存在欲求を根底に必要

とするか、物理主義的な脳科学は、自らと、意識や自発性という物質にない性質との間のギャップをどう考えているのか、また因果的に閉じた宇宙は因果的に説明不能な始原をいかに抱えざるを得ないか、という哲学史上の問いに沿って考察を進めた。より具体的には、以下のような課題を扱った。

**ダーウィニズム**は、自然選択を基本的な枠組みとして、生命現象から目的因を完全に取り除く世界観の代表的な立場である。それは生命を自然主義的観点から**合理的、体系的に説明する知の試みのひとつ**だが、他方で**それは生命の自発的、目的性性質の度外視を前提として成り立つ**、という構造も持っているのではないかという疑問。例えばダーウィニズムが進化を説明する際には、意識のような自発的現象さえも自然選択の産物として扱い、無目的な出来事の枠組みの中に落とし込む。しかし意識の自発性は説明されたのではなく、自然主義と折り合わない部分を問いの射程から外したにすぎない。ここにも、自然主義のような**一元的な知の構築には、それとは矛盾した現象の度外視を前提にする**構造があるのではないか、という問いを呈示した。

因果的必然性の宇宙の成立に関しては、その必然性が強固であればあるほど、なぜ宇宙がそのような必然的法則の中にあるものとして登場したかが問題化してしまう。つまり、必然性が成立してきた経緯を一定の法則の中で考えた場合、**なぜその法則が成立したかは、その考えの外に置かれてしまう**という構造がここに見出されるのではないか、という疑問。自然主義は厭くまでこの必然的法則の内部にとどまる。

本研究課題が着目するのは上記のように、**自然主義的世界自体が持つ前提の構造や、知の体系が物理主義的世界と、意識や生命現象とを融合しようとする際に生じる飛躍の構造**である。こうして特定の世界観に必ず伴い、**知の体系に本質的に内在する不問の前提の構造**を、思想史上の具体的な題材の中から明らかにし、それを哲学的に一般的な理論に結びつけることを通じて究明するのが、本研究課題の目的である。このように本研究課題は、自然主義や物理主義を典型とする**世界についての合理的な説明が、なぜ、どのようにその前提や飛躍を問わずに所持しているのかを、一般的な次元から究明することを根本的な「問い」とする**。

このように本研究は、**自然主義的世界観が隠し持つ前提、実在に対するその世界観の一面性**を見出すことを目的としていた。よって本研究は、哲学とその周辺で今日隆盛を見ている自然主義によって、心や生命、そして形而上学の問題をも解決しようとするのとは反対に、**自然主義自体が持つ限界点と有限性、実在に対するその限定性を見出そうとするところに特色があった**。

研究代表者の2018年度までの基盤(C)研究課題「生命創発の形而上学的諸問題に関する比較思想的研究」では、生命の「創発」を主な主題に設定し、物質にはない生命現象の「創発」を、物理主義的な概念枠と、生命固有の性質のための概念枠との断絶によって生じる事態として考察した。これを発展させ、本研究課題では**物質や生命も実在の一側面に関する概念と見なし、それらが不問にしている領域を問題化する**。これは**自然主義的な前提や、今日流行の新たな実在論的な言説をその前提から根本的に考え直す点**で徹底的であり、その意味で**創造的な点**であると考えられる。

概念の一側面性については、上記のような機械論と目的論、実在と観念をめぐる哲学史、科学史上の議論の中から探る。そしてこれを**世界の説明一般における概念と実在との相違**として考える。**概念はどこまでも実在の側面**でしかなく、その側面はすでに実在の限定であり、また異なる側面同士は飛躍や断絶を含んでいる。これを**アスペクト知**に関する哲学上の議論を参照しつつ究明する。さらにこの知に関し、**ある世界概念の正しさは、その世界概念自身によっては根拠づけられない**という、知の本質的な構造を明らかにした。

このように本研究は、生命は物質か否かという形而上学的問題に関して、物理主義や生命固有の生氣論といった特定の概念をも、アスペクト知として捉え直した。そして**物質が生命か**という二者択一以前の場所へと視点を戻し、それらのアスペクトをも**根本的に選択する領域が知の構造一般の中に存在し、そこでの選択の重要性を見出す点に本研究の学術的独自性がある**。そこからすると、物理主義も生氣論も、ある選択されたアスペクトを真の実在と混同していること、そしてどのアスペクトを選ぶかという判断は、世界概念に大きく影響することが見出される。これは**実証的な知も形而上学的な選択に支えられている事実**を示している。

こうして本研究は**実証的な知も実在のアスペクトである**という基本的立場を採る。そして物質や意識、生命などの概念を**根本的に吟味し直す**ことで、そこに既に形而上学的判断が含まれていることを見極め、そうした世界概念一般の性質を再定義しようとする点に**本研究の創造性がある**。このように本研究は、自然主義や新実在論が主張する「**実在**」も無前提な自然そのものではなく、**前提を持ち限定を受けた概念である**ことを明確にする目的を持っていた。

### 3. 研究の方法

上記の研究目的の遂行のため、本研究課題では以下の3つの具体的題材によって、世界概念の持つアスペクト性を明らかにし、そこから概念と実在との関係を再検討して行った。

#### 生命の自然主義的メカニズムと存在欲求について

近年、哲学の分野からも、進化や生命現象を自然主義的に理解する研究が進んでいる。しかしその根底では、自己保存のような、**物質の性質の中に見られない生命固有の働きが、その仕組みが問われないまま暗黙の前提となっている**。たとえば R.G.Millikan は生物の「固有機能」という考えを提起し、意味を伴うように見える生物の各々の行動さえも、ダーウィニズム的な自然選択、つまり生物種の無目的な存亡に結びつけた。それでも「固有機能」の背後には、生物が**自己保存しようとする存在欲求の働きが、問われずに前提とされている**ことの確認を意図していた。

#### 脳の働きから意識が発生する仕組みが問われないことについて

脳科学は、意識状態の存在を認めた上で、それと脳状態との対応関係を研究する。他方、原子が基本的「存在」である限り、その複合物は決定論的に動き、かつ感覚も主観もないと考えることは可能である。そこで、この断絶に抗して、J.Eccles が脳機能の解明を詳細に行った後、**なぜそこに脳から超越した主観を設定せざるを得なかったか**を詳細に検討する。また脳から意識の発生に関して、**量子レベルの不確定性から「自由」や主観を説明する諸説**

を検討する。脳内のマイクロチューブルでの量子状態の「収縮」に意識発生を見ようとした R.Penrose、それに対して主観的意識を「収縮」以前から見出そうとした H.Stapp といった物理学者たちの議論に立ち入り、量子論的意識論の内部でも「自由」や主観の扱い方や、物質と意識を实在のどこに位置づけるかについて、根本的な相違があることを確認する。

#### 因果的必然性の宇宙が偶然に立脚しなければならない構造について

宇宙成立の経緯を一定の法則の中で考えても、なぜその法則が成立したかはそこで問われない。この構造は、A.Schopenhauer の根拠律や、A.Whitehead の「限定の原理」など、伝統的な哲学史の中でも見られる。これらは一定の思考形式に則る思考が、その形式自体の由来には答えていない構造である。そこで、必然性の形式の宇宙の成立に関して、F.Schelling や九鬼周造の「原始偶然」を通じて検討する。また宇宙成立に関し、特異点を解消することで無から存在が生じた謎の克服を試みた S.Hawking の哲学的な意義についても考察する。これらの思想は、実証知一般における形而上学的な前提の排除不可能性と、そこに必ず伴う「不知」の領域の存在を示している。それらを L.Wittgenstein の規則論や、G.W.F.Hegel の「实在はそれ自身の他者である」というテーゼなどを通じて、さらに掘り下げて行く。

#### 4. 研究成果

本研究は、世界が自然主義的に完結していると思えず近代の自然観に対して、その自然主義的探究自身が基づく形而上学的な前提の構造を明らかにすることを目的にしていた。そこで近世以降の哲学史、科学史からその題材を選び、この前提が世界観を決定づけると同時に、自らの形而上学的な問題をも作り出した経緯を明らかにしようとしていた。

特に近代以降支配的になった機械論と熱力学的な無秩序の増大という自然観に対して、生命の自発的行為や新たな秩序の形成作用がどのように矛盾なくかみ合うのかという問題を取り上げ、特に生物学や脳科学、心の哲学などがこの矛盾にどのように対処してきたかを調べることで、生命の自発性を实在にどう取り込むかといった問題の糸口を明らかにした。

今後の改題として、自発性と決定性との対話を、事象とその始まりとの関係について応用できるかを検討する。具体的には宇宙成立に関して特異点を解消することで、無から存在が生じた謎の克服を試みた S.Hawking の理論を存在論的に洗練し直すことを試みる。一定の因果関係の始まりはその関係だけを唯一にすると特異点になるが、その因果の枠自体の成立という次元に立つならば、その点を特異にさせる根拠が失われるからである。

因果的必然性と偶然性については、Schelling や九鬼の、偶然に支えられた必然の宇宙という構図を参照する。その上で、必然の宇宙を支配する法則の由来について Whitehead の「限定の原理」を参照しながら、S.Hawking による「究極の理論」に関し、その理論は一体どこから来るのかという観点から批判的に考察する。これは佐藤勝彦が指摘する「物理学ではひとつの問題が解けると、それが新たな問題を引き起こすことになる」という構造を、「究極の理論」がどう乗り越えるのかという理論体系の根本性質に関わる問いである。こうして本研究は、「知」の体系構造を「無知」が支えるという仕組みを見出したが、それは「知」の消極性ではなくむしろ「無知」の積極性として評価された。このように本研究は合理的な知一般の中に存在する根源的な確信あるいは無知の役割を再評価するという意義も持った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 8件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 冲永宜司	4. 巻 17
2. 論文標題 誰が宇宙をシミュレートするのか？	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Heidegger Forum	6. 最初と最後の頁 39-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 冲永宜司	4. 巻 14
2. 論文標題 偶然を秩序化する働きとは何か？；累積淘汰説に対する「生命」の位置	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 帝京大学共通教育センター論集	6. 最初と最後の頁 1-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 冲永宜司	4. 巻 11
2. 論文標題 物質に抗する生命の流れ？－シュレーディンガーとベルクソンの狭間で	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 国際哲学研究	6. 最初と最後の頁 255-265
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 冲永宜司	4. 巻 13
2. 論文標題 現代汎心論の消極性と生命の積極性	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 帝京大学共通教育センター論集	6. 最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 冲永宜司	4. 巻 vol. 48-8
2. 論文標題 「汎心論」とウィリアム・ジェイムズ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 124-137
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 冲永宜司	4. 巻 10号
2. 論文標題 「自然」はなぜ多元的に開かれるのか	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国際哲学研究	6. 最初と最後の頁 93-101
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 冲永宜司	4. 巻 第46号
2. 論文標題 永遠性を希求する主体とは何か トランスヒューマニズムと自己超越	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 哲学・思想論集 (筑波大学)	6. 最初と最後の頁 47-68
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 冲永宜司	4. 巻 vol.12
2. 論文標題 無機物化した精神の「欲望」 シンギュラリティ後の世界についての、AI研究・ロボット研究家からの仮説	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 帝京大学共通教育センター論集	6. 最初と最後の頁 3-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 冲永宜司	4. 巻 vol.15
2. 論文標題 意識は創発したのか、それとも基本的実在なのか 生物学的自然主義と現代汎心論との境界	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 帝京大学共通教育センター論集	6. 最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 冲永宜司	4. 巻 vol.21
2. 論文標題 ジェイムズ、西田と現代汎心論	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 西田哲学会年報	6. 最初と最後の頁 45-60
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 冲永宜司
2. 発表標題 不死とAI
3. 学会等名 日本宗教学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 冲永宜司
2. 発表標題 誰が宇宙をシミュレートするのか？
3. 学会等名 ハイデガーフォーラム（招待講演）
4. 発表年 2022年



1. 発表者名 冲永宜司
2. 発表標題 現代汎心論のゆくえ
3. 学会等名 日本宗教学会第80回学術大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 冲永宜司
2. 発表標題 トランスヒューマニズムと永遠性
3. 学会等名 日本宗教学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 冲永宜司
2. 発表標題 トランスヒューマニズムと意識のゆくえ
3. 学会等名 意識研究会（大正大学）（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Takashi OKINAGA
2. 発表標題 Critical Examination into the Trial of Consciousness Uploading in Transhumanism. (Abstract was accepted but the meeting was canceled by COVID-19.)
3. 学会等名 International Association for History of Religion (IAHR) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 冲永宜司
2. 発表標題 ジェイムズ、西田と現代汎心論
3. 学会等名 西田哲学会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 冲永宜司
2. 発表標題 トランスヒューマンと創発主義
3. 学会等名 日本宗教学会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 冲永宜司	4. 発行年 2020年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 2
3. 書名 「世界宗教者会議」 『世界哲学史8－現代 グローバル時代の知』所収	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------